

稲わらの話

高山 邦明 (千葉市緑区)

刈った稲の脱穀が終わるとたくさんのワラが残ります。2000年もの歴史がある日本の米づくりの中で私たちの祖先はこのワラの様々な使い方を見つけ出し、余すことなく生活に利用してきました。そんな稲わらについて調べてみました。

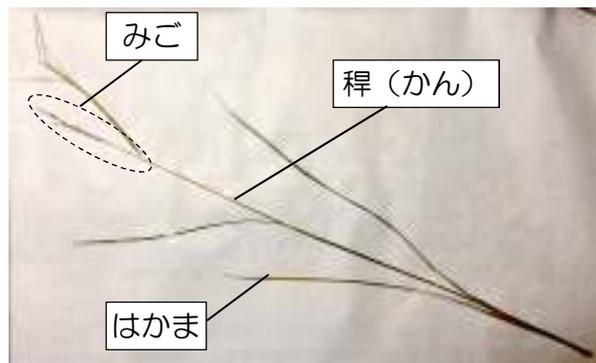
★稲わら利用の歴史

日本で米づくりが始まったのは縄文時代。でも最初の頃は稲刈りの時に穂先だけを石の包丁で切り取っていたのでワラは出ませんでした。縄文土器に付けられている縄の様子は稲ワラを使った縄ではなく、アシやマコモなどから作った縄だったと考えられています。その後、鉄が日本に渡ってきて農具にも使われるようになり、奈良時代には今と同じように稲の根元から刈り取る方法に変わりました。米づくりが広がり、新田の開墾が進められ、江戸時代にお米が経済の中心になると、大量に出るワラの様々な使い方が考案されました。明治時代から昭和の前半まではワラの需要が高く、副業としての農家のわら細工も盛んに行われていました。しかし、1950年代に入って農業が機械化されるようになり、また安価な石油製品が発達してくるとわら細工は次第にすたれてきました。現代の米づくりでは効率のよいコンバインが使われ、稲刈りと脱穀が同時に行われてワラは裁断されて田んぼに撒かれています。今では畑などで必要なワラは中国などから輸入されています。

★稲わらの姿

稲ワラは刈った稲を乾燥させて穂からモミを取ったものです。茎は“かん(稈)”，葉は“はかま”，モミが取り除かれた穂は“みご”と呼ばれます。かんは中が空洞になった断面が円形の管で、葉が付いていたところには節があります。ちょうど竹のような構造をしていて、しなやかで倒れにくいしくみになっています。かんをまっすぐ引っ張ってみるととても強いことに気づくことでしょう。その強さは20キログラム近くのかで引っ張っても切れないうらで、アルミニウムと同じくらいだそうです。ところがかんを折り曲げることを何度か繰り返すと簡単に切れてしまいます。この変形に対する弱さを補うために、ワラをたたいたり、ねじり(“より(撚り)”)をかけたり、編んだりします。

ワラは繊維質の植物であることに加え、中が空洞になっていることから、たくさんの隙間があり、保温性があると共にクッション性があります。こうしたワラの特徴を生かして生活の様々な道具として使われてきました。



★わら加工の前処理

ワラはそのまま屋根葺き(ふき)や牛や馬の餌、厩舎(きゅうしゃ)の敷きワラに使われますが、わらじなどを作るには前処理が必要です。

最初にハカマを取り除く作業の“わらすぐり”をします。穂先を持ち、反対の手をクシのようにして穂先から根元に向かって髪の毛をとくように動かしてハカマを取り除きます。木などでできたクシ型の道具も一般に使われ、千歯こきや足踏み脱穀機を使ってわらすぐりが行われることもあったようです。取り除いたハカマは袋に詰めて枕や布団として利用されたそうです。

次にすぐったワラ束を固い石の上に置いて回しながら木づちでたたく“わら打ち”をします。わら打ちをするとワラの組織が打ち砕かれて、柔軟で加工しやすくなり、かつ変形に対して強靱になります。節の部分は弱いので特に念入りにわら打ちすることが必要です。組織が細くなることでクッション性や保温性も高まります。わら打ちはその仕方の善し悪しはその後の製品づくりに大きく影響するので、技術と経験が求められる作業です。昔の農家の子どもたちはわら打ちが一人前になって初めて大人の仲間入りができたとされていて、小さい頃からわら打ちのお手伝いをしていました。たくさんのわら打ちをするために、ローラーの間にワラをはさんでつぶすわら打ち機も発明されましたが、質では手打ちにかなわなかったようです。

穂首に付いているミゴはかんの一番先端の節の上から抜き取ることができます。ミゴを集めて束ねて筆にしたり、神棚のお清め用のほうきにしたりして使われていました。ワラはかんだけでなく、余すところなく使われていたのですね。

★わらから作られる生活用品

ワラから生活に使う様々な用具が作られています。ワラに“より（撚り）”（ねじり）をかけて縄を作ること“縄ない”と呼びます。2つのワラ束を両方の手に持って、手をすり合わせるように動かして、それぞれのワラ束にヨリをかけると同時に2つのワラ束をあわせて逆方向のヨリをかけます。単純な手の動きの中で2通りのヨリをかけることで縄が作られる縄ないは手品のようで、素晴らしい技術です。コツを覚えるのにちょっと慣れが必要ですが、一度覚えれば小さな子どもでもワラからどんどん縄を作ることができます。同じようにワラにヨリをかけて太いしめ縄が作られます。しめ縄は神社や神棚に奉納される神聖なもので、必ず新しいワラを使って作られます。



2通りのヨリをかけられた縄

ワラを編むことでむしろや衣類が作られました。むしろ作りには専用の編み機も開発されて効率よく編まれました。衣類ではワラ笠やワラ帽子、体を覆う蓑（みの）、足元の草履（ぞうり）や雪靴など、身につける様々な衣類が作られ、ワラには保温性があるので防寒具として重宝されていました。俵（たわら）やかご、おひつなどいろいろな容器もワラから作られました。



わら草履は子どもでも作れます

むしろなどのワラ製品は不要になると厩舎の敷きワラにし、最後は肥料になり、無駄なくとことん使われていました。

このように日本には米づくりと共に育まれた稲わらの文化がありました。現代では稲わらは使われなくなり、必要な分は輸入でまかなわれているという状況です。かつて稲わら文化を支えてきた農家の方々は高齢を迎えており、伝統を引き継ぐのは今が最後のチャ

ンスとなっています。谷津田の活動の中でも何とか稲わら文化を伝承できたらと考えています。



☆参考資料

- ・宮崎清（1985）：藁Ⅰ・Ⅱ「ものと人間の文化史」、法政大学出版局刊
- ・宮崎清（2006）：わら加工の絵本（単著） 農文協刊

谷津田の農具図鑑② 鎌(かま)

鎌は鋏（くわ）と同じように日常的に使われている農具です。日頃の草刈り、そしてかつては稲刈りの時になくてはならない道具でした。現代ではコンバインなど機械で稲刈りが行われていますが、機械が入れない田んぼの隅や小さな田んぼの稲刈りに今でも使われています。

日本で米づくりが始まった縄文～弥生時代の最初の頃は稲の穂だけを石の包丁で刈る“穂刈り”が行われていましたが、弥生時代の終わり頃から鉄製の鎌が登場して今のように稲の根元から刈るようになったと言われています。

鎌は木の柄に刃が付いただけのとてもシンプルなしくみですが、刃の形、長さ、厚さ、取り付けの角度、柄の長さなどに様々な工夫がされていて、地方によっても違いがあるようです。稲刈り用には普通の刃の鎌のほかに、のこぎりのようなギザギザの歯が付いた“のこぎり鎌”が江戸時代に発明されて今も使われています。

普通の刃の鎌の使い方にはコツがあり、稲株に刃を垂直に当てて手前引くだけでは力を入れてもなかなか切れません。刃先を顕微鏡で拡大してみるとごく小さなギザギザになっており、刃を横にすらすらようにすると力を使わなくてもスッと稲を刈ることができます。そう、包丁で斜めに押し切ると同じ要領です。

鎌の刃は使っているとすり減って切れ味が悪くなってきますので、砥石（といし）で頻りに研いでやります。切れ味の悪い鎌は危ないような気がしますが、切れの悪い鎌で余計な力を入れて切る方が危険で、良く研いだ切れ味のいい鎌を使った方が安全に稲刈りを行うことができます。農家では刃が細くなるまで鎌を研いで大切に使っています。



のこぎり鎌

（高山邦明）



里山たんけんレポート

第 168 回 下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い

2014 年 1 月 5 日 (日) うすぐもり

冬季の恒例、鳥の姿を求めながら谷津の最下流部鹿島川源流の一つと合流するところまで巡りました。合流部では圃場整備した乾田が広がりますがその間の谷津は耕地はひとつもなく荒地に埋め尽くされていました。鹿島川の水路ではクサシギが採餌していましたが期待した鳥の姿はとてまもなく淋しい限りでした。観察会中 13 種を確認したのみ、観察会前後を加えても 15 種と言うありさまでした。谷津を歩いていてたくさんあって目立ったのはオオカマキリの卵のうでした。この卵のうもほとんど見られない年もありました。同じように鳥も回復してくれるように願わずにはいられません。生きものの痕跡ではモグラ塚、ウサギの糞、小動物の糞、ヤマユグガの繭などが見られました。谷津は荒れていましたが中を流れる小川周辺の景観は素晴らしいものでした。
(参加者 大人 12 名、高校生 4 名、こども 2 名； 報告：網代春男)

第 157 回下大和田 YPP「どんど焼きと昔あそび」

2014 年 1 月 11 日 (土) 晴れ

朝は冷え込んで田んぼには氷、畦は霜に覆われていましたが、たっぴりの日差しが谷津に降り注ぎ、風もなく、どんど焼きには絶好の日和になりました。田んぼからかかしを運んで立て、森の手入れで出た薪や枯れ草で覆って準備 OK。点火は火起こしです。4 つのグループで挑戦しましたが、今回はいつもになく火種すらなかなかできません。ようやく大きな火種ができてなかなか炎にできず苦戦。1 時間近くがんばって「やった〜！」の声が出たのはこども中心のグループでした。無事点火できてひと安心。炎が青空に向かって上がりました。暖かなお汁粉やお弁当を食べてから、午後は様々なゲームをしました。子どもたちは弓矢やかかるた取り、大人は童心に返ってベイゴマやけん玉。穏やかな真冬の谷津を楽しみました。



(参加者：大人 31 名、小学生 6 名、幼児 5 名；報告：高山邦明、写真：田中正彦・南川忠男)

第 104 回小山町 YPP「あぜの手入れ」

2014 年 1 月 26 日 (日) くもり

自然観察会の予定でしたが、参加者が少なかったことから田んぼの作業をしました。2 月に入るとニホンアカガエルの産卵が始まりますが、昨年から米づくりのお手伝いをしている田んぼは枝谷津の小さな棚田で、畦に穴が空きやすくなかなか水が貯まりません。実際にいくつか大きな穴が空いていたり、水路に泥が貯まって水の取り入れ口が詰まったりしていたので、補修をしました。ただ、この季節は畦が凍っている場所があるので本格的な補修は暖かくなったらすることにして今回は応急措置です。

それでも水がうまく貯まってくれるようになり、2 月 2 日には今季はじめてのアカガエルの産卵が確認されました (右の写真)。

(参加者：大人 2 名；報告：高山邦明)



<谷津田・季節のたより>

小山町

- 1月 4日 アシ原にエナガとシジュウカラの群れがいてにぎやかだったが、それ以外は冬鳥が少なく静か(高山)。
1月 18日 カシラダカの30羽前後の群れが田んぼに降りて餌を探していた(高山)。
2月 2日 いくつかの田んぼに二ホンアカガエルの卵塊を確認。新鮮な卵は昨晚、少し泥をかぶった卵塊は先週産卵したものと考えられる。小山では記録的に早い産卵(高山)。

下大和田

- 1月 3日 観察会下見。鳥は非常に少ない。そんな中であってアリスイが見られた。中川の下流部でイシガメがいた。冬眠しないのだろうか?(網代)。
1月 11日 気温が上がった日中、林の中からシュレーゲルアオガエルの鳴き声が聞こえてきた。YPPで長時間谷津にいてもツグミの声を聞くことがなかった(高山)。
1月 30日 観察会下見で谷津を一巡するがベニマシコ、ノスリは出たが鳥は非常に少ない(網代)。

イベントのお知らせ

谷津田ってどんなところ? と興味をお持ちの方、お米づくりを経験してみたいなと思っている方、YPPのイベントには大人から子どもまで、はじめての方でも好きな時にご参加いただけます。家族で、お友達どうして、もちろん、お一人でも気軽にいらして下さい。

連絡先(いずれも)：ちば環境情報センター (TEL&FAX: 043-223-7807 E-mail: hello@ceic.info/)

ご注意：・車でこられる方は必ず指定の駐車場に止め、農道などにおかないください。

- ・近くにトイレがありませんので、集合前に一度済ませておくご協力をお願いします。
- ・小学生以下のおさんは保護者同伴で参加ください。
- ・けがや事故がないよう十分な注意は払いますが、基本的に自己責任でお願いします。

▼第158回下大和田 YPP「アカガエルの産卵調査と木の名札づくり」

真冬の谷津田に産卵する二ホンアカガエルの卵塊数の調査をします。今年は何れくらいの産卵があるのでしょうか? 調査の後には、林の木に付ける名札づくりをします。気に入った木に自分の名前を入れた名札を付けます。お楽しみに。

日時： 2014年 2月15日(土) 10:00~14:00 いずれも小雨決行

場所： 千葉市緑区下大和田谷津田(ちば・谷津田フォーラムのホームページで地図をご覧ください。また、ご連絡いただければ地図をお送りします。)

集合： 中野操車場バス停向かいラーメンショップ脇に10:00(JR千葉駅10番成東あるいは中野操車場行きちばフラワーバスで45分<千葉駅発8:53、9:08、9:23など> 料金は520円)

持ち物： 弁当、飲み物、長靴、帽子、軍手、敷物など。

参加費： ちば環境情報センター会員および家族100円、一般300円、小学生未満無料

主催： ちば環境情報センター 共催： ちば・谷津田フォーラム

▼第170回 下大和田 3月の谷津田観察会とごみ拾い

二ホンアカガエルの産卵は大半が終わった頃です。新しい卵塊を探しながら春のきざしを求めて散策します。

日時： 2014年 3月2日(日) 10~12時 ☆小雨決行

場所： 千葉市緑区下大和田谷津田(同上)

集合： 中野操車場バス停向かいラーメンショップ脇に10:00(下大和田 YPPに同じ)

持ち物： 筆記用具、飲み物、長靴、帽子、敷物、ゴミ袋、午後まで活動する方は弁当など

参加費： 100円(小学生以上、資料代など)

主催： ちば・谷津田フォーラム 共催： ちば環境情報センター

▼第105回 小山町 YPP「自然観察とあぜの手入れ」

真冬の谷津を散策してアカガエルの卵塊や冬鳥などを観察します。また、畦の補修をします。

日時： 2014年 2月23日(日) いずれも10:00~12:30、小雨決行

場所： 千葉市緑区小山町 リンドウ広場(ご連絡いただければ地図をお送りします)

持ち物： 飲み物、長靴、帽子、軍手、敷物、もしあれば双眼鏡など。

参加費： 100円(小学生以上、資料代など)

主催： ちば環境情報センター

編集後記 相変わらず今季は冬鳥の数が少ないようです。いつもなら“クワッ、クワッ”と大きな声を出しながら谷津を飛び回るツグミの声を聞くことがほとんどありません。どこへ行ってしまったのでしょうか? そろそろ真冬恒例の二ホンアカガエルの産卵の季節です。例年、下大和田では2月初めに、小山では半月ほど遅れて始まるのですが、今年は2月2日に小山で産卵が確認されました。卵の状態から早いものは1月中に産み付けられたと推測され、2000年に観察を始めてから最も早い産卵の記録です。例年とはちょっと様子が違う今年の谷津の冬。正直、心穏やかでないのですが、長い谷津田の歴史の中では同じようなことが何度もあったことでしょう。もっと大きな視点でドンと構えていないといけませんね。 (高山 邦明)